

二〇二四年度 光塩女子学院中等科【第二回】

国語入試問題

二〇二四年二月二日（金）実施

《注意事項》

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- ② 解答用紙に、受験番号（漢数字・算用数字どちらでも可）と氏名を書きなさい。
- ③ 解答は、解答用紙に書きなさい。
- ④ 記述問題の字数については、すべて句読点をふくみます。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔話になるが、私が最初に大学教師になったのも、ある大学の国文学科の漢文学担当としてであった。そのころドイツの大学の客員教授としてヨーロッパに一年滞在したことがあり、どこでだったか前後の事情は忘れたが、何かの拍子に、中国文学の専門家がなぜ日本文学科に所属しているのかと訊かれて返答に窮したことがある。日本では常識的、ごく当り前のことであっても、外人の眼からみると奇異に感じられるということがしばしばあるものだが、これもそのひとつかもしれない。

そして欧米の知識人はとかく「なぜ、どうして」と、とことん(あ)メイカイな解答を求めようとするもので、「昔からそうなんだ」くらいでは、なかなか勘弁してもらえない。私がある時どう説明をしたかは、なにしろ三十年ほど昔の話なのでさだかでないが、**X**苦**Y**苦しただけは記憶に鮮やかで、①それは決して私のドイツ語の拙なさいのせいばかりではなかったと思う。その事情をほんとうに理解してもらおうとするならば、決して a 場あたりの説明で済むことではなく、日本人と漢文学との深いかわり、その長い歴史をつぶさに語らねばならぬはずだからである。

事柄はおそらく、日本人の文字使用が中国の文字＝漢字を(い)ユニウウすることから始まったという歴史的事実に由来する。中国における文字文化の発達が異常に早かったために、日本に限らず周辺の諸民族にとつては、みずからの文字を考えるよりも先に漢字が入って来て、それぞれの固有の文字を作り出すのはそれよりあとのことになってしまう。

日本でもやがて漢字を變形させたかな文字が生まれるが、それまでは、日本語を書きしるすためにも漢字を習得するほかはなかったわけだし、かなができて以後も、かな(仮名)はすなわち仮の文字で、漢字こそが真名、**(1)**文字と意識されていたのである。そして漢字を習得することは、単に記号を覚えることとは違つて、同時に漢語を習得することでもあり、それは必然的に②漢字文化を吸収することにつながる。

日本人が欧米人にくらべて数の計算に優れていることはよくいわれるし、また小学生の計算能力の(う)チヨウサなどで統計的にはつきり示されているらしいが、私はこれはそれぞれのことばにおける数の数え方の違いによる所が大きいと思つている。一、二、三から九十九、百と積み重ねる数え方は極めて(え)セイゼンと組み立てられており、ヨーロッパのことばとくらべても合理的でむだがない。【 1 1】

しかし考えてみるとこの一、二、三という数え方はりっぱな漢語であつて、本来は③ひとつ、ふたつと数えていたはずである。ところがひとつ、ふたつ、式とおままでが日常語の中に残つていただけで、その数え方で計算をしている日本人はいないであろうし、だいいち十一以上を本来のやまとことばで数えられる人は極めて限られてに違いない。またたとえば「みそあまりよつ(三十

四) 二などごと教えていたのでは、決して計算能力に優れているといわれることはなかつたであろう。【 2 】

事柄は更に高度な知的営為、教養や文芸にまでも及ぶ。漢字が入って来るまで、④日本には文献というものがなかつたのであるから、当初の段階から中国の古典に対し、みずからの古典であるかのように接したと思われるし、和語の文芸が成熟してのちもずっと日本の知識人は、和語系の韻文散文と並行して漢詩漢文を読み習つて来た。漢文学が日本文学(国文学)の一角を占めていた、中学や高校の国語科の古典に古文(日本の古典)と漢文の両方が含まれていたりするのも、そうした永い歴史的経緯をふまえてのことであり、外国人にとって理解し難いとしても無理はない。【 3 】

ただ⑤現在では漢詩や漢文で自己表現ができるという人はそう多くはあるまい。しかしそれは漢詩漢文には限らないのであつて、同じ日本語でも、文語体(古文)できちんと文章が書けるという人も多くないであろうし、また外国語教育がいかに普及したとはいえ、英語、ドイツ語、フランス語などですらすらと文章が書けるといふ人も決して多くはあらず。私が思うにこれは、口語文の文体が確立されると、自己表現はもっぱらそれに頼ることになり、他の文体は特別な一部の人を除いて、一般的には読むだけになるということであろう。【 4 】

ヨーロッパでも似たようなことがあり、かつてヨーロッパ人は文章を書こうとすればほとんどラテン語によつたはずで、英語、ドイツ語等々で文章を書くようになるのはそんなに古い話ではない。そして、英語、ドイツ語等々の文体が確立されると、現在では知識人でもラテン語ですらすらと文章が書ける人はそう多くないのではあるまいか。このように考えれば、漢詩や漢文を書く人が少なくなつてゐるのは別に異とするには足りず、②普遍的な現象の一端にすぎないのである。

近年これも②な現象として、漢字文化の見なおしというようなことがbしきりにいわれるようであるが、そうしたことは関係なく、私たちはみずからの言語生活、更には精神構造のルーツとして、漢字文化との永く深いかわりの歴史を時折りふり返つてみる必要があると思う。先述のように私たちは、計算をする時に決してひとつ、ふたつではなく、無意識のうちに漢語で計算をしている。この事実が示すように、⑥私たちの言語生活、精神構造のルーツは決して単一ではないのである。

(村上哲見『漢詩と日本人』による)

※注 国文学科…大学で日本文学を研究する学科。日本文学科。漢文学(中国文学や日本の漢詩文など)を研究することも多い。

窮した…行きつまつた。拙なさ…上手でないさま。つぶさに…細かく。営為…いとなみ。文献…研究資料となる、文書や書物。

韻文…詩歌などのリズムをもつた文章。散文…リズムや定型にこだわらず、自由な形式で書かれた文章。経緯…いきさつ。

ラテン語…古代ローマなどで使われていた言語。ヨーロッパの諸言語に大きな影響を与えた。

異とするには足りず…よくあること。普遍的…すべてのものにあてはまるさま。一端…一部分。ルーツ…物事の起源、根源。

問一 次の各設問に答えなさい。

(1) (あ) (い) (え) のカタカナを漢字に直しなさい。

(あ) メイカイ (い) ユニウウ (う) チョウサ (え) セイゼン

(2) ① 本文中の「X 苦 Y 苦」の空所にあてはまる漢数字を入れなさい。

② 次の熟語中の A、E にはすべて漢数字が入ります。A、E にあてはまる漢数字を書きなさい。

・ A 日 B 秋 ・ C 里霧中 (りむくちゆう) ・ D 十歩 E 歩

(3) a、b の本文中での意味を、文脈から判断してそれぞれの A、E から選び、記号で答えなさい。

a 「場あたりの」 A 思いつきの I 一般的な U 簡単な E 場に応じた

b 「しきりに」 A ときどき I たびたび U 少し E 場合によつては

問二 ①「それは決して私のドイツ語の拙^となさのせいばかりではなかったと思う」とありますが、ほかにどのような理由が考

えられますか。それを説明した次の文章の空欄^{くわん}にあてはまる言葉を本文中から二十字程度で抜き出しなさい。

・中国文学の専門家が日本文学科に所属するという日本では当たり前^{あたりまえ}のことを説明しようとする、() について細かく説明する必要があるから。

問三 本文中の (1) ・ (2) に最もふさわしい言葉をそれぞれの A、E から選び、記号で答えなさい。

(1) A 固有の I ほんとうの U あたらしい E 普通の

(2) A 具体的 I 局地的 U 模範的 E 世界的

問四 ②「漢字文化を吸収する」とはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次の A、E から選び、記号で答えなさい。

A 漢字を文字として使うだけではなく、中国の文化そのものを日本に取り入れるということ。

I 漢字を取り入れ、習得することで、中国の文化に精通するようになるということ。

U 漢字の意味を覚えるだけでなく、中国語の意味を日本の言葉に取り入れるということ。

E 漢字を取り入れることが中国語を学ぶことにつながり、視野を広げられるということ。

問五 本文中からは次の一文が抜けています。本文中の【1】〜【4】のどこに戻すのが最も適当ですか。番号で答えなさい。
・この場合、日本人は頭の中まですっかり漢語で考えているのである。

問六 ———③「ひとつ、ふたつと数えていた」とありますが、「ひとつ、ふたつ」という数え方は何を用いて数えたものですか。本文中から一語で抜き出しなさい。

問七 ———④「日本には文献ぶんげんというものがなかった」とありますが、それはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

ア 日本人が漢文を読み書きできるほどには教育が広く行き届いていなかったから。

イ 日本の教養や文芸が、文献ぶんげんとして残す価値を持つほど発達していなかったから。

ウ 文献ぶんげんとして残っていたものが、永い歴史の中ですべてなくなってしまったから。

エ 文字という手段が存在せず、記録や資料として文献ぶんげんを残すことができなかつたから。

問八 ———⑤「現在では漢詩や漢文で自己表現ができるという人はそう多くはあるまい」とありますが、それはなぜですか。筆者の考えを説明しなさい。

問九 ———⑥「私たちの言語生活、精神構造のルーツは決して単一ではないのである」とありますが、「単一ではない」とはこの場合、どういうことですか。本文に即して説明しなさい。

問十 あなたの使う言葉・ものの考え方と、漢字・漢文とのかかわりについて、具体例を挙げて二行以内で説明しなさい。

二 次の文章は、筆者がアフリカを旅した経験をもとにして書いたものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

毎日が熱い戦いだつた。でまかせと騙しの海だつた。ぼつたくりと喧嘩の嵐だつた。

私はトーゴの町を出て、溪谷地帯の村へと向かい、そこから隣国ベナンへ向けて国境を越える計画だつた。けれど予想した通り、行く手には難題が待ち構えていて、私の進路を阻もうとした。ミニバスもバイクもタクシーも、探し当てた車の多くが、差別料金を請求してきた。妥当な相場の二倍から五倍を超える場合もあつた。運転手たちは結託し、私を騙して車へ閉じ込め、時には辺鄙な村のどこかへ私をわざと置き去ることで、どうにか私に音を上げさせて、料金をぼつたくろうとした。彼らに対抗するために、私は自分の味方を探し、値段交渉を繰り返して、男たちと突き飛ばし合い、ニセ警官に吠えたりしながら、小さな乗り物を使い継いで、少しづつコマを進めていった。トーゴの旅は戦いだつた。値段交渉は戦争だつた。

中略……トーゴとベナンの国境までまだかなりの距離があつたが、筆者はどうとう徒歩で向かうことを決め、ベナンを目指して歩き出した。

自然の中へ解き放たれると、
1 青く澄んだ空が沁み渡ってくるように心の中が落ち着いた。私は自然が大好きだつたし、歩くことが喜びだつた。幸い二本の脚は丈夫で、女の（あ）イジもそこそこあつた。私は途中で何度か休み、リュックを下ろして汗をぬぐつた。二三キロのリュックの紐が両方の肩に食い込んで、一部が窪んで内出血した。小さなビニール袋の中に四〇〇ミリリットルの水があつたが、それはすぐに飲んでしまった。浄水剤は持っていたが、肝心の水源が見当たらず、塩と砂糖と飴を除けば、食糧は持っていないかつた。それでも喧嘩を続けるよりは、歩いたほうがずっと良かった。そして、しばらく森を進むと①不思議な世界が見え始めた。（い）ヨウジを抱いた地元の女性がどこからともなく現れて、私と抜きつ抜かれつしながら一緒に歩き始めたのだ。

彼女は私に微笑んだ。私も彼女に微笑んだ。そして、お互いそれぞれが自分のペースを守りながら同じ方角へ歩いていった。そしてさらに森を歩くと、ポリタンクを持った男性が、後ろから私に追いついてきた。私たちは今度は三人で、しばらくの間一緒に歩き、私が疲れて立ち止まると、二人も一緒に足を止め、木陰に座って休憩をした。私たちは特別に申し合わせたわけではないが、みんなそれぞれが荷物を持って、同じ道を一緒に歩いた。自然の特殊な方の中で、いつの間にか三人は、ペースや呼吸を調和させ、

適度な距離や空間と無理のない連帯感を保つことに成功していた。

②戦うことをやめたとき、すべての事物が流れ始めた。勝ち取ることをやめたとき、すべてはおのずとやってきた。私は水を与えられ、彼らの家にも招かれた。土で固めた、(う)デントウ的なタタと呼ばれる家々だった。それから村へ案内されて、一軒の宿を紹介された。食べるものは乏しかったが、心も体も満たされていた。

地球が優雅に自転を続け、夕日が大地を赤く染めると、やがて辺り一帯は平和な夜に包まれた。

翌朝私は早起きをして、夜明け前に宿を出た。森の道を進んでいくと、遠い地平の向こうから朝の光が伸びてきた。学校へ向かう村の子供が、森の陰から次々出てきて「ボンジュール」と元気に言うと、嬉しそうに走っていった。分かれ道へ来るたびに、私はそこで待機して誰かが通りかかるのを空を眺めて③気長に待った。

「ベナンはどちらの方角ですか？」

通行人は、漠然と辺り一面の森を指さし、適当に、そして照れくさそうに「ベナン、ウイ」とささやいた。

太陽の日差しが強くなり、影が随分短くなっても、国境付近の気配すらなく、体力ばかりを消耗させた。ベナンへ向かって歩いているのか、国境がちゃんと存在するのか、夕方までには街へ着くのか、すべての疑問は謎のまま眼前に広がる大地に呑まれた。とにかく私は、あてずっぽうに歩いてみるより仕方ないのだ。

しばらく行くと、道の脇から一人の女性が現れた。巨大な A びょうたんを切って作った大きな桶に B 水を溜め、それを頭の上のせて運び帰る途中だった。女性は背筋をまっすぐに保ち、首をしっかりと踏ん張って、二十数キロはありそうな水桶を、器用に頭にのせていた。重労働の途中だったし、彼女の邪魔にならないように、私は声をかけなかったが、彼女は私を見つけると、立ち止まって微笑んだ。私はついに話しかけ、彼女も私に言葉をかけたが、私たちの使う言葉はお互い全く異なっていた。それでも機嫌よさそうに、彼女は私にいろいろ話した。適当に私は頷いて、それから彼女にいろいろ訊いた。

「頭の水は重そうですね。2、あなたの左手にある小さな桶は何ですか？ 私が代わりに持ちましようか？ そうすれば両手が自由になって、頭の桶を支えられます。大丈夫？」

彼女はニコニコしていたが、質問を理解したようだった。そして表情とジェスチャーで、小さな桶の理由を話した。私は、ああ、と驚いた。

「ここ！ 大きい桶に穴があいてる。この穴から漏れる水を左手のミニ桶で受けているのね。なんというか、器用というか、水を無駄にしないというか、私はとても感心しました」

私の言葉に彼女は照れた。

「ところでベナンの方が、どちらになるか知っていますか？ ベナン？ ベーナン？ ウィ？」

彼女は大きな瞳を使って、正しい方を説明し、私たちは二人並んで、ゆっくりと前へ歩き始めた。

とても④不思議な関係だった。私も彼女も勝手にしゃべり、好きなところで勝手に笑った。彼女が言っていることは、もちろん

一つも分からない。けれど、なんだか楽しかった。楽しそうな彼女の声が、私をそんな気分にした。

土壁の家が近付くと、彼女は自分の家のある斜め前方へ道をずらして、草の小道を進んでいった。彼女はタタの家の近くで、そ

ろりと首を回転させると、私の方へ笑みを投げた。私も笑みを投げ返し、それからベナンの方角へ自分の道を進んでいった。

彼女の説明した通り、国境らしき場所に着いた。私は国旗の立ててある一軒の小屋へと入っていった。何人かいる役人のうち、

一人にパスポートを手渡すと、彼は「ベナンへようこそ」と言った。

「ベナン？ ここはもうベナンですか？」

「そうだよ。ベナンだよ。入国スタンプを押してもいいかい？」

役人はスタンプを取り出して、パスポートのページをめくり始めた。

⑤「ちよつと待って！」

と、私は言った。

「適当に道を歩いていたら、知らずにトーゴを抜け出して、ここへ来てしまいました。トーゴの出国スタンプをまだ押してもらっていないのです。トーゴのオフィスはどこですか？」

役人はちよつと考えた後、意外とあっさり私に言った。

「トーゴのオフィスはずーっと向こうだ。引き返すのは大変だ。出国のことは心配いらない。いいかな？ ベナンのスタンプをこ

こへ押すよ？」

⑥「ちよつと待って！」 出国した形跡も残らないまま、ベナンへ入国したとなると、それは国際規則のうえで問題になったりしま

せんか？ 私は怪しいスパイじゃないし、不正を働く意図はないのです」

役人は大きく頷いて、紳士的に少し笑った。

「いいんだよ。トーゴもベナンもほとんど同じだ。トーゴは僕らの兄弟だ。スタンプのことは気にしなくていい」

役人はとても慎重に、スタンプに青いインクをつけて、丁寧にページへ押しあてた。

私は、今度はベナンサイドを車に乗って走っていった。窓から見える光景は、トーゴのそれと変わりなかった。トーゴとベナンは兄弟だった——特に地学的見地において、まさに疑いようもなく。

私はかつて旅に出る前、世界地図を床に広げて、世界に思いを巡らせていた。国ごとに色が分かれた地図へ、印をつけ、ピンを打ち、国境線をマーキングした。けれどどれだけ覗き込んでも、地図の中に広がる世界は区分けされた国土ばかりで、⑦その中にある詳細は一つも見えてはこなかった。そして、私は旅に出た。

トーゴやベナンや周辺国には、いろんな部族や民族がいて、土地に合った暮らしをしていた。トーゴとベナンの間には、特に『線』など見当たらず、入国審査も適当だった。地図の上に引かれた線は、地元の人が引いたのではなく、植民地支配を競った国が、勝手に書いたものだった。そして私が刺したピンの、針の尖端が破った範囲は、実質的には広大で、そこへは異なる民族や、さまざまな人や価値観や、文化や暮らしや宗教が数限りなく含まれていた。私は地図の奥に広がる、ピン穴の向こうの多様性を、想像できていなかったのだ。

私は桶を頭にのせた女性の笑顔思い出した。彼女はトーゴの辺りにいたが、ベナンの人かもしれない。そして結局は、⑧どちらであつても彼女には関係なさそうだった。

(中村安希『インパラの朝 ユーラシア・アフリカ大陸684日』による)

※注 トーゴ、ベナン：どちらもアフリカの国名。 辺鄙な：都会から遠く離れていて不便な。

ボンジュール：フランス語で「こんにちは」の意味。 オフィス：事務所。 サイド：側。

問一 次の各設問に答えなさい。

(1) (あ) く (う) のカタカナを漢字に直しなさい。

(あ) イジ (い) ヨウジ (う) デントウ

(2) 「抜きつ抜かれつ」と同じ意味になるように、次の空欄に共通して入るひらがな二字を答えなさい。

・ 抜い 抜かれ

(3) A「ひょうたん」・B「水」を用いた次の慣用句の空欄にあてはまる言葉を、それぞれのア、エから選び、記号で答えなさい。

A ひょうたんから が出る 【意味】 思いもかけないことが真実となって現れること。

ア 種 イ 駒 ウ 雲 エ 声

B に水 【意味】 弁舌が達者で、よどみなくすらすらと話すこと。

ア 横やり イ 巻き舌 ウ 立て板 エ 川流れ

問二 本文中の 1 ・ 2 にあてはまる言葉として最もふさわしいものをそれぞれのア、オから選び、記号で答えなさい。

1 ア まさか イ きつと ウ まるで エ おそらく オ 決して

2 ア ところで イ けれども ウ たしかに エ あるいは オ そうして

問三 ①「不思議な世界が見え始めた」とありますが、地元の女性との出会いをきっかけに「見え始めた」世界で、筆者はどのように変わりましたか。筆者の変化についての説明が完成するように、 A ・ B にあてはまる言葉を指示に従って本文中から抜き出して答えなさい。

文中から抜き出して答えなさい。

・ 筆者は、トーゴの町にいたときには、進路を阻む相手と対抗し交渉しなければならなかった。しかし森の中に入ってから、偶然出会った人と A (漢字二字) し、 B (漢字三字) を持つことができるようになった。

問四 ②「戦うことをやめたときのおのずとやってきた」とありますが、どういうことですか。説明として最もふさわしいものを次のア、エから選び、記号で答えなさい。

ア 相手に対して好き嫌いの感情で接するのをやめると、自分にとって良いことも悪いことも同じように起こるようになったという事。

イ 今まで戦っていた相手から完全に打ち負かされると、敗北を知ったことで、人に感謝する気持ちを自然と抱けるようになったということ。

ウ 相手と激しくぶつかり合うことをやめ、それまで抱いていた怒りを捨てると、自然と求める物が手に入り、物事が良い方向に進むようになったということ。

エ 勝つことで達成感を得ようとしていたが、それをあきらめると、かえって物事をとどこおりなく成し遂げていくことができるようになったということ。

問五 — ③ 「氣長に」は、別の表現でどのように言い換えられますか。この時の筆者の心情を踏まえて、同様の意味になるように一語で答えなさい。

問六 — ④ 「不思議な関係」とありますが、「私」と「彼女」の関係においてどのようなことが「不思議」なのですか。次の【】内の語を必ず用いて説明しなさい。

【コミュニケーション 言語】

問七 — ⑤・⑥ 「ちよつと待つて！」とありますが、筆者は同じ言葉をくり返しています。この言葉に関する筆者の心情を次のように説明しました。説明文を読んで後の各設問に答えなさい。

〈説明文〉

筆者は、入国スタンプを押そうとする役人に対して、「ちよつと待つて！」と二回言っている。この言葉からは、**A** がかえる。しかし、ベナンの役人は、**B** だと考えていたため、「いいんだよ」と返事をして筆者の思いを打ち消し、筆者自身もその後、車の中からベナンの風景をながめて、確かに役人の言葉の通りだと納得した。

(1) **A** に入る筆者の心情として、最もよくあてはまるものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア トーゴでトラブルを起こした自分が入国を簡単に許可されるはずがないのに、特に問題視されないのは変だという疑い
イ ここがベナンだという役人の言葉が嘘としか思えず、長い距離を歩いてきた苦勞が報われないかもしれないという落胆
ウ 国境を行き来する際に必要なはずの所定の手続きをしていないので、そのことを後でとがめられたら困るといふ緊張感
エ 外国人女性である自分を見下して話を聞いてくれない役人を説きふせて、必ず自分の主張を認めさせようとする競争心
- (2) **B** にあてはまる言葉を本文から十字以内で抜き出して答えなさい。

問八 — ⑦「その中にある詳細」とありますが、どういうことですか。本文中の言葉を用いて簡潔に答えなさい。

問九 — ⑧「どちらであったも彼女には関係なさそうだった」とありますが、筆者がなぜそのように考えたのかを次のように説明しました。

・

について、後の【条件】に従ってそれぞれ答えなさい。
・トーゴとベナンの間にある地図上の国境線は

であり、実際にそこで

をしている彼女にとっては意味を持たないものだろうから。

【条件】

本文中から二十字で探し、最初と最後の五字を答えなさい。

本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問十 — 「ピン穴の向こうの多様性を、想像できていなかった」について、次の各設問に答えなさい。

(1) 「ピン穴の向こうの多様性」とはどのような多様性ですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 際立った特性を持った特定の地域同士のかげ橋となり、両者をつないでいく多様性。

イ 遠くから見ている時にはわからず、近くで実際の様子に接してみても初めて見えてくる多様性。

ウ 痛みを味わっているときにはわからず、そこから解放されて初めて生み出される多様性。

エ 狭い地域から始まり、徐々に世界中に広がって人々の中で受け入れられるようになる多様性。

(2) 筆者は、旅の前には「想像できていなかった」多様性を、旅を通して知っていく経験をしています。筆者のように、今まで想像できていなかった多様性に出会った、あなた自身の経験を百字以内で具体的に書きなさい。